

「全学共通教育」のひろば

No.11 特集号

Un roseau アンロゾ

総合教育科目ガイドブック

美しく食べるように学べ

人権問題研究センター 鍋 島 祥 郎

総合教育科目と全人的教育

医学研究科 朴 勤 植

君たちは大学でなにを学ぶか

文学部 広 川 禎 秀



3号館前広場から学術情報総合センターを望む

2001年3月

編集・発行 大阪市立大学教務委員会

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

TEL (06)6605-2935

タイトル “Un roseau (アン ロゾ)”

—フランス語：一本の葦—について

.....
B. Pascal (1623-1662)は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。しかし、Pascalは言うのです。

L'homme est un roseau pensant.
(ロム エタン ロゾーバンサン)

—人間は考える一本の葦である—

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、考える（思考する、思想する）という行為によって、有形の現象の世界（形而下の世界）のみならず、その奥にある広い世界（形而上の世界）を知ることができる存在なのだ。

Un roseauとは「あなた」のことなのです。

美しく食べるように学べ

人権問題研究センター 鍋島祥郎



わたしは大阪市立大学の人権問題研究センターの鍋島祥郎と申します。皆様を「全学共通教育」というものにご案内する役を仰せつかりました。市大の教員としてはずか7年の未熟者ながら、あい務めさせていただきます。

本日のお題は「美しく食べるように学べ」です。がつがつ勉強しろというのではありません。むしろその反対です。さてそれはどういう意味なのでしょう。

★『シラバス』という小宇宙

あなたはすでに『全学共通科目シラバス・履修案内』（以下、『シラバス』と略）という冊子を受け持っているだろうか。まずこの冊子について語らねばならない。

この冊子は一見愛想もクソもない。特に第1ページの「全学共通教育の目標と位置づけ」という、日本国憲法で言うならばあの格調高い「前文」にあたるところが、なんとも実務的というか無味乾燥である。これを読んで「全学共通教育って素敵♥️」と言う人は、相応な「通」である。

しかし、この『シラバス』こそ、大阪市立大学が日本でもっとも教育に情熱的な大学であることを示す一冊なのである。大阪と東京の文化の違いは、なにやら

アングロサクソン文化とラテン文化の違いに似ている。西日本をラテン日本、東日本をアングロ日本と呼ぶ日も近いとか(注・そんなわけない。)一見アングロ系に見えるこの『シラバス』だが、そこにはラテン系大阪の熱い血が流れていたのである(注・こういうエスニックな比喩は民族的偏見を助長するのほどに)。

まずなにが凄いか。この『シラバス』には全学共通科目のすべてについて、内容から成績評価の方法まで詳しい解説がついているのである。大学の教員というのは、日本でもっともものぐさで横柄な人々である。「勉強したい人はかつてに受講しにきなさい」というのが大学の常識であった。そんな常識をかなぐり捨てて、自らの授業について熱く語ろうというのがこの『シラバス』である。

『シラバス』があるおかげで、あなたは座して共通教育という小宇宙を知ることができる。これを丁寧に読めば、ひとりひとりの教員の個性もかき取ることが

できる。あなたの個性にあった科目を見つけることができる。実際に授業を受けて面白くなかった場合、その授業のシラバスを見てみよう。「はーん、なるほどな」と思うはずである(注・例外もある)。無駄をする前に、シラバスを読み解く方法を身につけるべし。

★魂なき専門人

あなたは大学にどういう目的で入学されたのだろうか。いろいろあるだろう。わたしは20年ほど前に、死ぬための準備をしようと思って大学に入った。意外にそんな人が多いことを知ったのも大学に来たおかげだったし、死ぬ気がなくなったのも大学のおかげだ。ありがたいことです。

しかし、「専門人」になろうとして大学に来た人は、気をつけるべし。そういう気分させるのは、近

代という社会が人間を愚かにしようとする陰謀だと、かのマックス・ヴェーバーも言っている。だから専門教育とは、人間を愚かにするための教育であると心得るべし(注・ただし、愚かになるか、愚かなふりをするしなければ生きていけません。念のため。)人間は何かになろうとするとき、人間であることを忘却する。そうして失った人間を、目先の娯楽や快楽で埋めようとする。専門のたこつばに陥らないように用心したいものだ。

★大学で賢くなれるか?

全学共通教育は、人間としての賢さの教育をめざしている。この大学は、創立以来そういう理念をかかげ、2年間の「教養教育」を実施してきた。いまは「教養教育」ということはなくなったが、大学のすべての教員が参加する四年一貫の「共通教育」として

再編した。また、伝統的な学問体系ではなく、社会の現実に即したユニークなカリキュラムを提供しようとして改革を行ってきた。だから、共通教育の科目や主題は、「人文科学・自然科学」といった伝統的な枠組みとはちがって、「都市・大阪」なんていうけつたいなネーミングがなされている。「大阪を学んでどうする!」と思われるに違いないが、これがミソなのである。はたしてこの改革は成功するのだろうか、その結果はあなたの未来として証明されることになる。

ところで、人間はどうすれば賢くなるのであろうか。これは永遠のテーマである。スタートレックに登場するバルカン人は理性を極めた社会システムを作りあげたらしい。(注・スタートレックはやたらと単純化された民族文化論に満ちている。クリンゴン人は生まれながらに凶暴とか。)おかげでバルカン人として育つと必ず理性的である。かつて人間社会の発展をそういうものとして構想していたことがあるということだ。だが、いまやそれも信ずるに足りない。人間はそ

う簡単に精神的な「進歩」を遂げないのである。人間は永遠に愚かでしかいられないのだろうか。そんなテーマに、大阪市立大学の共通教育は21世紀も挑み続けていくことになる。

★脱「パンキョー」の共通教育

さて、賢くなれるかどうかという大上段なテーマはほどほどにして、全学共通教育の効用とその使用方法について説明しよう。

さきほど少し述べたように、「専門分野」という殻の中に閉じこもっていたのでは、あなたの持っている可能性は開かれない。自然や社会の多様性について広く知るとともに、脳味噌の異なる部分に適度な刺激が必要なのだ。受験においては他人に勝つために、どうしても自分の得意分野で勝負をしなければならぬ。こういう事態はこれから先の人生でも多々あるこ

とであろう。だから受験勉強というのも一つの重要な経験だ。だがあなたの人間としての学習能力をそのよ

うな狭いところに押し込んでいけない。他人に勝つための勉強という学習のスタイルを脱ぎ捨てて、あなたの人生の深みをつくっていく学習のスタイルを身につける。その玄関こそ共通教育なのである。

20年も前に、わたしも「教養教育」を「パンキョー」と呼んで差別していた。なぜそんな気分になっていたかというと、それは「皆がそうしていた」からだ。恐ろしいことである。物事の核心を自分で確かめようとせず、皆が「パンキョー」と呼ぶものを、わたしも見下していたのである。

幸いなことに、幾人かの先生たちが、わたしのその軽率な態度をぶちこわしてくれた。文学部に在籍していたわたしが「楽勝」として受講した「生物学」の授業で、ゴキブリの交尾について教わった。あの恐るべき「害虫」も愛を確かめ合い、子孫を残すのである。

学問というのは実にシンプルであり、シンプルだからこそ学問なのである。だが、「難しいことをこなしてこそ優秀」という観念にとらわれていると、それが見えない。ゴキブリの愛を知ってから、はじめて人間の愛について考え始めた。

これも「楽勝」として受講した「物理学」の授業で、ニュートンやアインシュタイン、プランクなどの「哲学者」を知った。自然科学は人間社会について何の答えも与えてくれないという観念は吹き飛んだ。物事を複眼的に見るということの面白さを実感した。

★さらばたこつば

しかし、量子力学についての授業はさすがに音を上げた。目の前に霞がかかったようで、何一つ理解できなかった。わからなかったから、今も量子力学の入門書を読んでいる。仕事にはほとんど役に立ちそうにな

いけれど、そこに隠されている「真実」が何かを、自分なりに知りたいと思うのである。そんな「むだ」をしているときにこそわたしは自分の人生が豊かだと思えるのである。

そんなふうには単位を取り損ねた授業は数知れない。語学ではドイツ語と英語の他に、ギリシャ語・ラテン語・ロシア語まで受講し、後の三つは5週間ほどで断念した。ものになったものは結局なかったが、楽しかったし、それぞれの言語がどういうものかを知ることができた。こんなぜいたくができるのも、大学ならではである。

最近の学生の中には学びの達人もいて、わたしの講義を一度も休まずに受講しても、レポートは面倒だから単位はいらなと言う人や、面白いしもっと学びたいと言って同じ講義を3年連続で聞きに来る人もいた。

共通教育のもう一つの重要な効用は、他学部の学生とともに学ぶことができる点である。わたしの講義

でも人権問題について理系・文系や学年を問わず、多様な学生が討論に花を咲かせる。課題をこなすために、放課後や昼休みに集まって議論する。そして、友だちになる。専門のたこぼれに入ってしまったくないためには、クラブ・サークル活動と並んであなたにとって大切な出会いの場となろう。特に医学部の学生は限られた杉本キャンパスでの出会いを大切にしてほしい。

★食うようにして学ぶべし

「働くために学ぶのではなく、学ぶために学ぶ社会を」と言ったのは、ハッチンスという教育学者である。医者になるために、エンジニアになるために、大企業の有能な事務員となるために、あるいは何になってもいいかわからないが、とにかく何かになるために、皆さんは「勉強」をして大学に進学してきたかもしれない。その夢は実現してほしい。しかしその一方で、

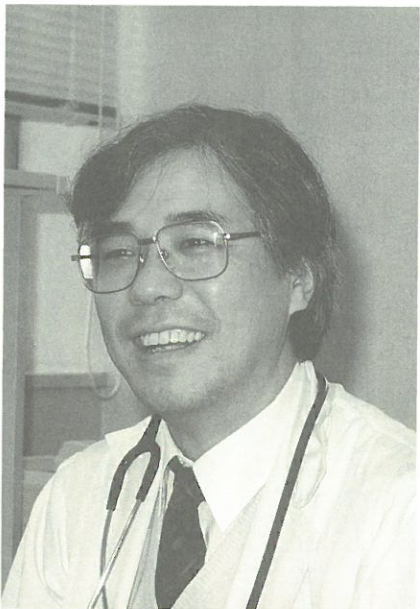
学ぶということが、食べることや寝ることと同じように人間にとって生きるための基本的な営みであることを忘れないでほしい。食べることが明日の労働のための栄養補給に成り下がっては美食という文化が生まれないように、学ぶことが明日の労働のための準備に成り下がってはいけないのである。全学共通教育を大いに利用して、あなたも学びの美食家になってみてはいかがだろうか。これが本当の「美学」だ！

……お粗末までございました。



総合教育科目と全人的教育

医学研究科 朴 勤 植



総合教育科目の中に「情報化の光と影」という科目があります。この科目を医学部として担当するようになってから5年以上になります。毎年、1部（昼間）と2部（夜間）の学生に2〜4時間枠でオムニバス講義のひとつとして行ってきましたが、最近では2部で四

〜五〇名、1部では二〇〇名を越す受講者になっており、大講義室がほぼ満員になる盛況です。

私の担当テーマは、「情報システム、とくに医療情報システムについて」です。毎年の試験には「医療におけるコンピュータ利用の功罪について記述しなさい」という設問を含めた問題を出してきました。当初の解答例の多くはコンピュータの非人間性に注意し、医療は人間性を重んじるべきである、という意見が多かったのですが、最近はコンピュータ利用の功の部分と述べる意見が多くなってきました。講義の内容が少し変わってきたのも原因かもしれませんが、学生諸君の考え方も変わってきたように思えます。

医学部では、総合教育科目として「現代の医療」という科目も提供しています。こちらの方は臨床医学、すなわち皆さんが実際に病院や診療所で受ける医療やその基礎になる医学知識一般についての講義です。医学部附属病院の医師が実際の診療経験を通じて病気に

私は本学出身ですが、学生の頃（20年以上前ですが）には教養課程（以前の2回生までの学部教育のこと）に、このような医療についての講義はありませんでした。時代が変わったと言うことでしょうか。現在の総合教育の提供科目を全学共通教育のシラバスで見ると、私の時代よりも数倍の科目が提供されています。

リベラルアーツ

大学の起源はヨーロッパとされていますが、中世ヨーロッパの大学では、教える科目群を「リベラルアーツ（自由学芸）」と呼んでいました。その思想的源流は、自由人にふさわしい教養を重んじるという古代ギリシャの考え方にさかのぼります。20世紀の初め、学問が専門ごとに細分化され、実利追従型になったことへの批判が高まり、一般教養教育の重視が叫ばれるに

つれて、リベラルアーツは改めて欧米の大学の理念となりました。戦後の日本でもこれが新制大学の理念とされ、ほとんどの大学に教養部がつくられました。現在でもアメリカではリベラルアーツカレッジ（文理大学）と呼ばれる大学があります。これが、総合教育の前身です。

中世で教えられていたリベラルアーツの科目は、論理、文法、修辭の「言葉」に関わるものと天文、算術、幾何学、音楽の「自然」に関する7科目しかありませんでした。現代と比較すると楽なような気がしませんが。実は、中世の大学の上級三学部で神学・医学・法学を学ぶ前段階として下級学部で修めるべき教養をリベラルアーツと呼んだのです。大袈裟に言えば中世から現代に至る500年の間に、社会・経済・文化・科学が発展し、いま提供されている多くの科目群になったと言っわけです。ここで皆さんも気づいたかもしれませんが、本学の総合教育科目・基礎教育科目・外国語科目の中にはこれらリベラルアーツ

ツ7科目と重なる科目が含まれているのです。が、それらは全学共通教育科目の一部です。

では、総合教育科目とは何物なのでしょう。

教養と総合教育科目

「リベラルアーツ」——自由学芸。なにか自由な学芸会という雰囲気という言葉ですね。自由人にふさわしい教養を重んじる。ふむふむ。文法の正しい言葉が話せる。ちよつと気の利いた修辭（駄洒落ではありません）が使える。なるほどなるほど。天文学、星占いができる。これで中世の社交界（自由な学芸会）では教養人なのだ。と思われた学生諸君もいるかもしれませんね。ちよつと待ってください。それは皆さんの自由という言葉の取り違えです。皆さんの多くは大学に入学するまでは自由が少なく（受験勉強や親の保護下）、大学に入れば自由になれると思って入学されま

した。しかし、現実には講義を聴かなければならないので教室に肉体的に束縛をされているし、おもしろくもない講義内容のために精神的束縛を受けていると感じているかもしれません。その通り、自由には肉体的束縛からの自由と精神的束縛からの自由とがあります。自由人にふさわしい教養とは、精神的束縛からの自由を指しています。リベラルアーツとは「自由になるための技法」と訳すこともできます。自由になるための技法が教養なのです。皆さんが大学生になったときから、入学以前の肉体的束縛からはずつと自由になっていると思います（その証拠に講義をさぼる）。しかし、精神的束縛から自由になったでしょうか。（いや、わたしは興味のない講義の時は密かに携帯電話で遊んでいる。）

では、教養とは何なのでしょう。

教養とは知識だ、という人がいます。あたかも学生の頭、コップ、に教師がヤカンから水（知識）を流し込むことが教育であるかのように。確かに基礎教育科

目のように知識中心の科目もあります。いまでもそうですが、「古典を習う」ということがあります。習字を習うように、習うことによりその古典に流れている知恵を汲み取る作業をしていたのです。しかし、これは教養の一部です。

現代社会に生きている皆さんは、過去の人たちとはいろいろな意味で状況が異なる世界にいることを実感していますか。ひよっとしたら、今生きている世界が自分が生まれる以前からずーと同じであるとは思っていないでしょうか。たった10年前には日本は世界経済の牽引車であったのにいまでは就職の大氷河期、ほとんどの学生が携帯電話を持ち、いつでもどこでも世界中に電話をかけることができる、ヒトの全遺伝子配列が解明されクローン動物が作製され生命のなぞをどの過去の時代の人々よりも人類が知るようになった、エネルギー問題・環境問題など地球規模の解決困難な問題が生じている等々、現代社会が高度、複雑化そして限界化していることはご存じだと思います。このよう

な現代社会に生きる皆さんにとって、自分がどう生きているのか、どのような状況にあるのか、なにができるのかということを意識する、自覚することが教養なのです。「教養を身につける」ことは単に知識があることではなく、知識をどのように生かすか、ということを知ると言うことでしょう。

これが総合教育科目が多岐に互って提供されているひとつの理由だと思います。

全人的教育

私の現在の専門は医療情報学で、とくに病院組織における情報の創生・伝達・蓄積・検索などの効率化にコンピュータシステムをどのように応用することができきるかを研究し実践する実学的な分野です。また、広い意味での医療における情報をも取り扱っています。

現代の医療は、高度に複雑化しており、また医療は人

的資源を多く必要とします。医療情報は、年々膨大な量になり、情報へのアクセスや活用にコンピュータシステムは欠くことの出来ないツールとなっています。総合教育科目では、「医療における情報システムの光と影」を提供してきましたが、受講生のみさんの回答が少しずつ変化してきたことは先に述べました。これはどういうことでしょうか。時代の変化でしょうか。学生諸君の意識の変化でしょうか。当然、講義を提供する私自身の変化もあるかもしれません。コンピュータシステムが社会において重要な位置を占めていることは、すでに皆さんはあらゆる所で知らされています。日本の政府がIT革命と叫んでいます。数年前まではコンピュータを自分で持っている学生は少数でした。しかし、現在では携帯電話という一種のコンピュータを殆どの学生が持っています。そしてその利便性は十分に体感されています。インターネットも10年前にアメリカの大学生がモザイクと呼ばれたブラウザ（閲覧ソフト）を開発してから急速に発展しまし

た。日本のインターネット人口も三〇〇〇万人に迫る勢いだと言われています。たった3年前までは学生にメールとは何ぞやを講義していたくらいですから、急に時代が変化してきています。

情報システムの光が学生諸君にとって意識化されてきたこととなります。パソコン、携帯電話、インターネットなどのコンピュータ利用が私たちの身近な環境に入り込んでくることにより、コンピュータシステムに対する違和感が減少し、その活用に期待感が生じてきているのでしょう。医療という基本的には人間対人間の関わりにおいてもコンピュータシステムの果たす役割が期待されるようになってきたというわけです。

皆さんは、病氣のことを良く知っている医者の方が患者さんとしては安心すると考えますよね。当然この場合、知識イコール情報です。いかに最新の医療情報を入手し、患者さんの診断治療に活用できるかが有能な医師のひとつの資質になっています。手術などの医療技術に優れていることは言うまでもないことで

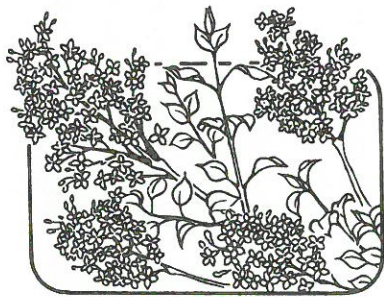
す。しかし、コンピュータばかり操作していて患者さんの体に手も触れない医師、コンピュータの情報信じて医師としての判断や決断ができない、病気を診ても人を見ることのできない医師はおかしいと思われるでしょう。確かに、私のテストでもそのことを危惧する解答が多くありました。

人々は医師に全人的な医療を求めています。「全人的医療」とは患者さんの病気だけを診るのではなく、患者さんの抱える問題点を全体的に捉えようとする医療です。医学知識だけ豊富な医師では問題があると考えられており、人間性豊かな医師が求められています。そして、医学部教育においては全人的医療教育が求められています。患者さんの抱える問題点を全体的に捉えるには医学という専門知識だけではなく、文化人類学的な側面、経済的な側面、文化的な背景、倫理的な側面など多様なアプローチが必要です。

このような全人的医療、人間性豊かな医師というのは当たり前のことである、と皆さんは感じられるでしょうか。

分がどう生きているのか、どのような状況にあるのか、なにができるのかということを意識する、自覚すること、すなわち「汝自身を知れ」という謙虚さを求められているのではないのでしょうか。

本学で学ぶ学生諸君が21世紀の社会にとって一人一人が人間性豊かな教養人として自己を確立するために総合教育科目が活用されることを願っています。



う。この当たり前のことを前提としているから患者として医療を受けることができるのだと。しかしながら現実には、文部省や厚生省（今年から文部科学省、厚生労働省）がやっと2、3年前から医師の育成には全人的医学教育が重要であると提言しはじめたのです。実は、全人的な教育というのは、医師教育だけに求められていることではなく、他の学部の子生にも求められていることだと思います。皆さんは、「無知の知」という言葉を知っていますね。ギリシャのソクラテスの言葉です。リベラルアーツの原点は、「汝自身を知れ」、すなわち、「無知の知」といった自分自身に対する謙虚さを知ることであり、それを後世に伝えていくことが重要であり、全人的な教育をすることが教養教育だという意見があります。

現代社会は、20世紀に勃発した急激な科学技術の発展により多大な恩恵を受ける一方で、産業、経済、社会構造が激変し種々の人類規模的な問題も引き起こしています。私たちは、21世紀を生きるにあたって、自

君たちは大学でなにを学ぶか

文学部 広川 禎 秀



四月の大学キャンパスは、若わかしい雰囲気があふれていてさわやかです。受験勉強から解放された新生がキャンパスにあふれ、大学に新生の息吹を吹きこんでくれるからです。新入生諸君の大学の講義や新しい生活に期待するまなざしに接すると、教員生活のゴ

ールもみえてきた私は、すこし面はゆい気持ちにさえなります。

「教養とはなにか」というのが私に与えられたテーマです。しかし、このテーマでなにかを述べることはけっして容易ではありません。というのは、「教養とはなにか」ということが現代において自明ではないからです。

「自分さがし」について

ここ数年、私の所属する文学部では心理学を専攻したいという学生が増えています。一般教育でも、心理学の受講生が非常に多い状態がつづき、心理学担当の先生も苦勞しています。私は、歴史の専門ですから、くわしい理由をしらべたことはありません。ただ、いまから六年前、一九九五年に起こった阪神淡路大震災のあとから急にふえたように思います。大震災で現代都市が一瞬にして崩壊し、物質文明のもろさ、人間の生命のはかなさを知らされました。コミュニティーも

崩壊し、都市の人間関係の希薄さを実感させられました。そして、大震災で生じた物質中心の現代文明への疑問は、少年少女にあつては、いじめ・学級崩壊といわれる日常体験とかさなりました。そこから、若者のあいだで「こころ」の問題への関心が広がり、自分のあり方についての模索が始まったのではないのでしょうか。震災で予期しなかったボランティア活動が若者のあいだに起こりましたが、他者を助ける行為のなかに、自分の存在を確かめたい心理もあつたといえるでしょう。心理学への関心には、こういった「自分さがし」という動機があるのではないかというのが私の推測です。こうした問題意識は、他の分野の学生諸君にも潜在的にあるのではないかと思います。

はたして、大学は「自分さがし」の要求にこたえてくれるでしょうか。私は、若者の求める「自分さがし」には客観的な現代社会の背景があると思います。が、大学はそのことを考えるにはいちばん適した場だと思えます。

かつて大学が少数エリート教育機関であつた時代には、学生のあいだで「いかに生きるべきか」という問いが発せられました。そこにはエリートの強い自我意識がありました。私は、じつは「自分さがし」という言葉はあまり好きではありません。後向きさのひびきがあります。それに対し、「いかに生きるべきか」という問いには、未来へ向かう意欲が感じられます。いまの学生諸君は、むかしのエリートの特権意識からかなり自由ですから、大学だけでなくいろんな場で「いかに生きるべきか」という問いを発して、自分と社会を見つめたいのだと思います。

そのさい、あわてないで、大学入学後しばらくは、受験時代に得たもの、失つたものを洞察することをすすめます。しかも、それぞれの流儀で。そして、大学で最初に学ぶ「般教（パンキョウ）」を自分と社会を深くみつめるための授業と位置づけ、それらに向き合つてほしいと思えます。

「早く専門の授業を受けたい」という人に

「一般教はつまらない、早く専門の授業を受けたい」という声をよく聞きます。苦しい受験勉強をがまんしてきたのは、大学で専門の勉強をするためで、高校の延長のような「一般教」はもうたくさんだという人もいます。でしよう。「一般教」といういい方には、専門より一段程度の低い授業という感覚が込められているように思います。

実際につまらない授業が、「つまらない」といわれなくても仕方ありません。私も、準備不足で今日の授業はよくなかったと思うときは、学生諸君が「つまらない」という顔をしています。しかし、問題は、一般教育そのものを「つまらない」といえるかどうかです。逆に「おもしろい」授業なら、すべていい授業かといえば、そんなはずはありません。「おもしろい」という中身こそが問題です。

いま専門が重視されるのは、科学の高度化や社会の複雑化がすみ、高度化、細分化された専門的知識や

能力の習得が強く求められる客観的背景があるからです。専門の学習では、それぞれの専門分野におけるすぐれた研究成果を学びとらなければなりません。

ところで、専門のすぐれた研究にはそれぞれオリジナリティがあり、専門の学習ではそれを学ぶことが重要になります。しかし、オリジナリティは海に浮かぶ水山のようなもので、水の上で光っている小さい部分がオリジナリティだとすれば、水の中にはその何倍も大きな部分があり、それは既存の膨大な研究の吸収と研究過程で捨て去られた試行錯誤の山ということができます。水の中が重要なのです。「はやく専門の学習を」という声を聞くと、基礎の軽視に流れていないか気になります。功をあせってはいないかと不安になることがあります。

「一般教」にもやはりオリジナリティがあるのです。すぐれた専門研究が背景にある概説や学生への問いかけ、深い思索に支えられた知性のひらめきを感じられる授業に対して、それを「つまらない」と感じるとす

れば、それはむしろ受け手の側に問題があるのです。なかには、専門を知ってから聞いてこそ、深さがわかる「一般教」もあるのです。

私が望みたいのは、それぞれが専門を勉強する目的はなにかをよく問いなおしてほしいということです。みなさんは、自分の専門をなんらかの他の目的のための手段として位置づけているはずで、ところで、大学の専門の学問は、一つ一つは社会の大きな目的を実現する手段にすぎないものです。ですから、専門の狭い世界に入れば入るほど、目前の結果だけを求めて、その根本的目的との関係がみえにくくなり、実際忘れてしまう可能性がはらまれています。そこには、大学入試のための受験勉強と共通する落とし穴がありはしないでしょうか。

オウム真理教事件は、狭い専門では「優秀」な人物に大きな欠落があった事例です。なぜ、理科系の「秀才」がオウムに走ってサリンを造ったのか。情報学者の西垣通氏は、科学技術の高度化に対し、科学技術を

批判し、制御する知性が決定的に不足していたとい、科学技術を社会科学・人文科学との連携のもとに研究する必要があると指摘しました(『朝日新聞』一九九五・六・二)。解剖学者・養老孟司氏は、入試で人を評価する愚を説き、戦後教育は自分で人生を深く考え、自己の思想を持ち、それを自分の行動原理とすることを教えてこなかった、戦前、そうすることを許さなかった教育勅語は廃止されたけれども、戦後教育には大きな弱点があったと指摘しました(同)。それぞれ傾聴にあたいする意見です。最近、石器発掘の捏造事件が大きなニュースになりましたが、一研究者のモラルの欠如が日本の考古学界などに甚大な被害をもたらしました。現代日本の一面を象徴する事件というほかありません。これらはすべて、真の教養にかかわる問題です。

教養とはなにか

教養とは、自ら考えて生きていこうとするとき助けしてくれる人生または社会に関する深い認識といつてもいいでしょう。では、教養を身につけるにはどうすればいいのか？ 青少年の心の「荒れ」への対処法の一つとして、学校教育に「奉仕活動」を導入しようとする考えがあります。短絡的発想ではないかと思われるかもしれませんが、私は、現代社会のモラルの荒廃を憂え、その対応として人生マニュアルをつくるというのではほんとうの解決にならないと思います。みなさんは、受験勉強のなかで、要領よく学習するための参考書を山ほど買いこんだに違いありません。しかし、人生を「ハウ・ツウ」や「マニュアル」で切り抜ける考え方を根本的に疑ってみる必要があるのではないのでしょうか。

二二世紀には、日常生活や地域の問題も、世界的視点で考え、人類的課題との関係で位置づけなければならぬでしょう。そして、難問解決のため多様な異なる

意見をまとめ、総合化できる人間性と能力が求められます。「ハウ・ツウ」や「マニュアル」に頼るタイプではない人間が求められるといえましょう。受験競争型の現代日本のあり方を見なおし、どうしたらそこから抜け出すことができるか、高い教育水準を維持しながらどうやったらその弊害をなくすることができるかが問われています。

そのことを、個人の尊厳と民主主義の観点から考える必要があるでしょう。戦後の日本は、人間の尊厳を説く教育基本法を持ちながら、それを十分に生かし、実践してこなかった歴史があります。いい換えると、受験競争をおおるようなことばかりやってきたわけです。いま、教育基本法そのものを変えようという議論が起こっているのは、偶然ではありません。科学が恐ろしくすすんでいく必要だというのが私の考えです。

私は、科学技術を含め、実学を専門にしようとする諸君ほど、人間と社会の本質に関する洞察力を養って

ほしいと思います。文系であれ、理系であれ、自分の専門分野だけでなく、さまざまな分野に触れ、自分の専門分野をみる視野をひろげてほしいと思います。それは、真の教養の問題にもなります。

大阪市大と恒藤恭

以上のように考えてみると、われわれは現代の大学そのものも絶対視できなくなりそうです。大学はほんらい、大学そのものを疑うことをもみずからの課題とし、大学に対する社会の批判にも耳を傾ける識見が求められます。これは学問と大学の本質に根ざすことです。それは自らの独善に目をつぶる態度を批判する精神ですが、また同時に時の権力への迎合をも批判する精神です。大阪市立大学の歴史のなかにも、そういう精神を見出すことができます。

みなさんは、大阪市大の初代学長恒藤恭の名前を知

っていますか。恒藤は日本の著名な法哲学者で、一三三年の滝川事件で末川博らとともに京大法学部を辞めたことで知られています。滝川事件は、戦前日本の自由主義が軍国主義に抑圧された事件として有名です。文部省が自由主義的な刑法学者・滝川幸辰教授を、その学説を理由に処分したことがこの起こりですが、当時恒藤は「死して生きる途」という一文を発表し、学問の自由が否定されるとき大学教授は職を辞することによって真理を守らなければならないと説きました。

恒藤は、「大学における諸講義を通して、学生は単に専門的知識を修得すると云うだけではなく、進んで正確なる学問的批判力を養うことを要する」といい、そのためには大学教授の研究と教育の自由が不可欠であるとともに、かかる大学の本質が否定されようとするときは断乎として抵抗する必要があると述べています。恒藤は、真理を追求しない大学は大学の名にたがいしないのみならず、そういう大学の学問のあり方を疑

●●●●● 筆者略歴 ●●●●●

鍋島 祥郎 (なべしま よしろう)

1963年生まれ
1991年 大阪大学大学院人間科学研究科博士課程中退
現在、人権問題研究センター助教授
専攻分野／部落問題論、人権教育論
担当講義／現代の部落問題、人権教育ファシリテーション論演習、
人権・進路指導の研究

朴 勤植 (ぱく くんしく)

1955年生まれ
1986年 大阪市立大学医学部医学研究科博士課程終了
現在、医学研究科助教授
専攻分野／血液内科、医学医療情報学
担当講義／情報の光と影

広川 禎秀 (ひろかわ ただひで)

1941年生まれ
1971年 京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学
現在、文学部教授
専攻分野／日本史学（日本近現代史）
担当講義／戦争と人間、人間文化基礎論、日本史演習

編集後記

「アン ロソ」第2号をお届けします。

「共通教育」「教養教育」については、近年どの大学でもこれまでのありかたを再検討し、重視する方向に進みつつあるようです。ひとりの人間として生きていくうえでの「教養」があらためて問われる時代になっていることの表れでしょう。

その基礎となる総合教育科目について、本号でも三人の先生がそれぞれの立場から熱いメッセージをお寄せくださいました。学生の皆さんには、学問と人生の先輩からのことばとして読んでいただければと思います。

読後の意見・感想があれば下記にご一報ください。なお、その際、氏名公表の可否も明記してください。

大阪市立大学公式ホームページ 大学教育検討委員会ホームページ

kentoi@mae.osaka-cu.ac.jp

ったのです。

恒藤らが学問の自由のため最後まで節をまげなかったのは、学問に自由が不可欠と考えたからだけではなく、学問を自分一個の栄達的手段とみなしたり、保身に走らなかつたからです。恒藤についていえば、人間として羞じない生き方を望んだからだともいえるでしょう。恒藤は、真理すなわち普遍的なものによって国家、大学を相対化しただけでなく、自分をも相対化したのです。そこに恒藤の教養のあり方が示されています。同時に教養の本質的なものが示されていると思います。私は、生き方と結びついてこそ教養は意味をもつと考えるからです。

京大を辞めた恒藤を、大阪市大の前身・大阪商科大学に招いたのは、当時の商科大学長・河田嗣郎かたしろうでした。ちなみに、滝川事件ののち、恒藤自身の専門の法哲学の研究がいつそう深化していったことは、興味深いものがあります。恒藤は、戦後、商科大学の学長になり、ついで市大の学長となりました。みなさんに

は、市大のなかに刻まれているこうした歴史からも、大学でなにを学ぶか考えてほしいと思います。

二二世紀に向かつて

二二世紀がはじまりました。歴史的にいえば、二〇〇一年自体にそれほど画期的意味があるわけがありません。日本社会には二〇世紀末以来つづく時代閉塞感がただよっています。しかし、世紀の変わり目で、なにかしら新しい気持ちで自分と世界をみつめなおす人が多いことも事実です。私は、みなさん自身も、この新世紀の始まりに興味を与えるのだと思います。混沌とした世界であるからこそ、社会と人間、そして教養にもとづく生き方とはなにか、じっくりと考えてみようではありませんか。